石岡市文化調査報告会　発表要旨
二〇一五
石岡市教育委員会・常陸風土記の丘

石岡市文化財調査報告会
発表要旨

特別報告

東日本大震災の復旧・復興に伴う発掘調査　齋藤貴史　2
～福島県南相馬市での取組

調査報告

常陸国総社宮 随神像の修復　飯泉太子宗　6
～修復からわかること

新池台遺跡　長谷川秀久　10
～新池台遺跡で検出された墓坑の副葬品について

佐久上ノ内遺跡　谷仲俊雄　14
～佐自塚古墳被葬者の住んだ豪族居館か

宮平遺跡　谷仲俊雄　20
～常陸風土記の丘に眠る大遺跡

八軒台掩蔽壕　柏山滋　24
～戦争末期に急造された石岡海軍航空基地の飛行機置き場か

2015

石岡市教育委員会
石岡市常陸風土記の丘

例 言

1. 本書は，2015（平成27）年８月８日に開催する「石岡市文化財調査報告会」（主催：石岡市教育委員会，共催：常陸風土記の丘）の発表要旨です。
2. 報告会の開催にあたっては，石岡市ふるさとづくり寄付金を活用いたしました。ご寄付いただきました方々に感謝申し上げます。
3. 本書の執筆は各報告者が行いました。編集は石岡市教育委員会 文化振興課が行いました。
4. 報告会の開催にあたり，下記の方々からのご協力とご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

茨城県教育委員会　　株式会社東京航業研究所
特定非営利活動法人古仏修復工房　　常陸國總社宮
有限会社勾玉工房Mogi

石岡市文化財調査報告会　プログラム

開催日　2015（平成27）年８月８日（土）
会　場　常陸風土記の丘　研修室

10:00	開会	
10:10	常陸国総社宮 随神像の修復 ～修復からわかること	飯　泉　太子宗
10:50	新池台遺跡 ～新池台遺跡で検出された墓坑の副葬品について	長谷川　秀　久
11:20	佐久上ノ内遺跡 ～佐自塚古墳被葬者の住んだ豪族居館か	谷　仲　俊　雄
11:50	質疑	
12:00	休憩	
13:00	東日本大震災の復旧・復興に伴う発掘調査 ～福島県南相馬市での取組	齋　藤　貴　史
13:40	宮平遺跡 ～常陸風土記の丘に眠る大遺跡	谷　仲　俊　雄
14:10	八軒台掩蔽壕 ～戦争末期に急造された石岡海軍航空基地の飛行機置き場か	柏　山　　滋
14:50	質疑	
15:00	閉会	

関連展示「石岡を掘る―石岡市発掘調査速報展」ギャラリートーク

東日本大震災の復旧・復興に伴う発掘調査　～福島県南相馬市での取組

茨城県教育庁総務企画部　齋藤貴史

はじめに

平成23年3月11日，宮城県牡鹿半島の東南沖130㎞を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生し，茨城県にも甚大な被害をもたらしました。私は常陸太田市の日向遺跡で発掘調査をしていました。翌日の現地説明会に向け最終の準備をしていたところ，突然の大きな揺れが私達を襲いました。立っていられないほどの長い横揺れが続き，思わずしゃがみ込んでしまったことを記憶しています。

福島県のホームページより

東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のため，震災から4年後の平成26年4月から一年間，私は福島県へ派遣されました。派遣された南相馬市の沿岸部では，地震によって発生した津波により壊滅的な被害を受けていました。津波によって流されてしまった家屋の跡や壊れたまま残っている建物，流されてきたまま置き去りになっているボートや車など，津波による被害が生々しく残っている様子を目の当たりにし，被災された方々が一日も早く元の生活に戻れるよう，今，自分ができることを精一杯やろうという思いが強くなりました。私が派遣された26年度は，沖縄県・福岡県・高知県・京都府・さいたま市・茨城県から6人が県文化財課に，大阪市・東京都・栃木県（2人）・山形県から5人が財団間派遣として県文化振興財団に派遣され，チーム福島として一丸となり，福島県の復旧・復興に向け業務に取り組んできました。

復興調査の概要

1　平成26年度の体制

県の復興事業が比較的相双地区に集中していることを受け，県文化財課としての調査体制の一部を南相馬市に駐在という形で置きました。また，調整機能，市町村復興調査支援体制を渡利分室（財団渡利分室内：福島市）及び本課（本庁9階）に置き，更なる復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いの迅速化，調査の効率化を図ってきました。

課長┬本庁（課長を含む10人　※内1人は派遣職員）
　　├渡利分室（県職員3人）
　　└南相馬市駐在（副課長，県職員，自治法派遣職員，財団からの派遣職員の9人）

2　業務内容（南相馬市駐在）

○県直営事業関連（県職員・派遣職員・財団派遣職員の5人）

土取場候補地，復興公営住宅関連，ほ場整備関連，海外防災林造成関連等の分布調査，試掘・確認調査

※発掘調査は財団が実施

○市町村技術支援（派遣職員4人）

事業量が膨大な南相馬市の事業を支援

復興支援の実際

1　南相馬市の支援体制

派遣職員が2人一組となり，2現場の発掘調査及び報告書作成業務を担当しました。

○東町遺跡（高知県・茨城県からの派遣職員）

○上渋佐原田遺跡（京都府・沖縄県からの派遣職員）

※南相馬市職員（1人）が総括

2　東町遺跡の本調査

平成26年4月から7月までの4か月間，災集団移転促進事業の造成工事（個人住宅建設）に伴う発掘調査（調査面積：約2,000㎡）を高知県から派遣された職員と共に行いました。

○調査の迅速化

・建物が建たない範囲は遺構検出のみ（調査面積減）

・電子平板「遺構くん」の活用（平面図のみ）

・ポールを使用した遠隔撮影（奈良文化財研究所）

○調査体制の充実

期限までに調査が終了できるよう，財団から１人，奈良文化財研究所から毎週２人ずつの他，二本松市，白河市，田村市，北塩原村，会津美里町，湯川村の県内市町村からも支援を受けました。

○調査成果

縄文時代中期（約4,500年前）の竪穴建物跡27棟，平安時代（約1,000年前）の竪穴建物跡５棟，掘立柱建物跡５棟のほか，貯蔵穴などの土坑を多数確認しました。遺物は，縄文土器（深鉢・注口土器・壺形土器・ミニチュア土器），土製品（土偶・土器片円盤），石器（石鏃・磨製石斧・打製石斧・凹石・石皿・浮子），石製品（耳飾り），土師器（坏・高台付坏）などが出土しました。

縄文時代では，この時期のこの地域の特色である複式炉（土器埋設部，石組部，前庭部で構成）を付設した住居が密集かつ重なりあう状態で確認され，三時期ないしは四時期に渡って連続して竪穴建物の建て替えが行われたと想定されます。今回の調査で、新田川中流域における縄文時代中期の拠点集落（環状集落）の一端が明らかになりました。

また，空白期を経た3,000年後の平安時代になると再びこの場所にムラが築かれるようになります。ムラの詳しい様子は明らかではありませんが，掘立柱建物と竪穴建物で構成されていました。特に中央部に位置する建物跡は，一辺が７ｍを計測する大形であることから，この付近の中心的な役割をもった建物であったものと考えられます。

東町遺跡全景（南西部から）

○調査成果の地域への還元

・6/12(土)：東町遺跡，上渋佐原田遺跡で現地説明会開催　※約300人が参加

・6/24(火)：原町第二小学校６年生が遺跡見学　35人が参加

・7/8(火)：原町第一小学校６年生が遺跡見学　70人が参加

・9/9(火)～21(日)：さいたま市教育委員会主催の「最新出土品展2014」にて復興調査関連展示で東町遺跡等出土遺物を展示

・1/17(土)～3/22(日)：南相馬市発掘速報展開催　東町遺跡や中才遺跡，観音堂石仏など平成25･26年度に実施した復興事業に伴う発掘調査の最新出土品を展示

○復興調査関連についての報道

・派遣職員紹介（福島テレビ　5/27）

・現地説明会の案内（広報みなみそうま　6/15）

・現地説明会の様子（福島民報　6/22）

・現地説明会の様子（南相馬チャンネル）

・復興調査について（読売新聞　8/6）

3　東町遺跡の整理

平成26年７月から平成27年３月まで，東町遺跡の報告書作成に向け，整理作業を行いました。

※報告書刊行は平成27年度以降の予定

○作業内容

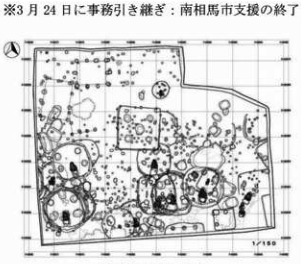
・写真や図面整理，図面修正・仮版下作成

・「トレースくん」というソフトを使用して図版作成

・原稿執筆や遺物集計表等の作成

※整理作業員：遺物注記，土器の接合・復元など

※3月24日に事務引き継ぎ：南相馬市支援の終了



東町遺跡遺構全体図

4　県事業の支援

南相馬市支援を担当している派遣職員４人が１週間交代で，相馬市今田地区の県事業である市街地復興効果促進事業（土取り事業）の試掘調査の支援を行いました。

・期間：9 月 10 日（水）～　1か月間
・面積：61,000 ㎡（山地）
・成果（最初の１週間が終わった時点）：現在トレンチ５本（尾根上）開けたが，遺構・遺物は確認されませんでした。

※今後は北斜面，南斜面の尾根筋や谷頂などにトレンチを入れていく予定

5　南海老地区の試掘調査支援

南相馬市の職員と２人で，植物工場建設予定地の試掘確認調査を実施しました。

・期間：11 月 17 日（月）～12 月 3 日（水）
・調査：夏に実施した続きで，建設予定地の西部にあたります。北側から南側に下る傾斜地で，等高線に直交するように 20 か所の試掘坑（2m×10m）を設定し調査しました。
・成果：南部の低地から奈良時代の竪穴建物跡１棟，時期ははっきりしないが井戸跡，土坑，ピットなどを確認しました。

※27 年度に本調査する予定（約１万㎡）

6　深野地区・石神地区の表面調査支援

派遣職員４人（沖縄県・高知県・京都府・茨城県）で，土取場予定地において製鉄関連遺構有無を確認するため，表面調査を実施しました。

・期間：1 月 26 日（月）～29 日（木）
・成果：廃滓場や木炭窯と想定される溝状の窪地，作業用の平場など数か所を確認することができました。
・深野地区：面積 320,874 ㎡　廃滓場１か所，木炭窯数か所，窪地・平場十数か所
・石神地区：面積 140,553 ㎡　廃滓場６か所，木炭窯数か所，窪地・平場二十数か所

※調査結果をもとに保存範囲や試掘範囲などを決定

7　小山田地区の試掘調査支援

派遣職員２人（京都府・茨城県）で，森林再生事業に伴う作業道建設のため，試掘調査を実施しました。

・期間：2 月 16 日（月）～20 日（金）
・調査：作業予定地は，小山田古墳群内であり，西から東へ延びる尾根上に４基の古墳が確認されています。今回の調査は西側から２番目の古墳（径 10mほどの円墳）の調査を行いました。作業道を北斜面側に作るということで，墳頂から北斜面に試掘坑１か所（１×12m）を設定し調査しました。
・成果：周溝は確認できませんでしたが，裾部に土留めと思われる葺石を確認しました。また盛土用の土をとって平場となった範囲も確認できました。遺物は出土しませんでした。

※事業者とは，平場より外側（北側）に建設するよう協議

8　発掘された日本列島展 2015 の出展に向けて準備

○出展遺物のピックアップ・整理　12/12(金)～
○出展遺物の写真撮影　12/17(水)
○原稿・出展遺物の資料カード作成　1/7(水)

9　南相馬市発掘速報展開催に向けて準備

○博物館に遺物搬入・レイアウト確認　1/8(木)
○遺物展示　1/13（月）～15（水）
○展示遺物撤収　3 月 23 日（月）

＜東町遺跡から出土した主な遺物＞

生活・職場環境等

1　放射線の影響

○平成 26 年度の放射線に対する福島県の考え方
・帰還困難区域，居住制限区域での作業禁止
・避難指示解除準備区域で，年間 20mSv（毎時 3.8μSv）を超える放射線量の地域では作業禁止
・積算被ばく線量計を携帯と被ばく線量の管理
・自然放射線レベルである年間１mSv（毎時 0.23μSv 相当）の範囲内に収まるように作業を調整

○これまでの放射線累積積算量

・0.542mSv（平成27年3月25日現在）

※昨年度派遣職員の放射線累積積算量

平均：0.746mSv

最大：0.866mSv，最小：0.626mSv

2　借り上げ公舎（レオパレス）

平成26年度は，南相馬市内の借り上げ公舎1か所にコミュニケーションを図るため，全ての派遣職員が居住しました。

・南相馬市駐在所まで徒歩5分

・南相馬市整理室まで徒歩15分（自転車の場合5分）

※昨年度までは福島市内の何か所かに分かれて居住

3　買い物等

○南相馬市内のスーパー（フレスコ・ヨークベニマル・イオン）等は夜の8時で営業終了

○コンビニエンスストアは24時間営業

4　交通関係

○ＪＲ常磐線：南は竜田駅（楢葉町）～原ノ町駅（南相馬市），北は相馬駅（相馬市）～浜吉田駅（亘理町）で不通　※相馬駅－亘理駅は代行バス

※1月31日（土）から原ノ町駅－竜田駅で代行バス運行開始（1日2往復）

○国道6号線：双葉－富岡間が平成26年9月15日（月）から自由通行

○常磐自動車道：浪江－山元間が平成26年12月6日（土）に開通

※平成27年3月1日（日）に全線開通（富岡－浪江間）

福島県の平成27年度の体制

26年度と同様に，県文化財課としての調査体制の一部を南相馬市に駐在という形で置いています。また，調整機能，他市町村復興調査支援体制を自治会館（県庁に隣接）及び本課（本庁9階）に置いています。

○27年度派遣職員（埋蔵文化財関係）

・福島県：長崎県・鳥取県・愛知県・埼玉県から4人
　　県財団から2人

・南相馬市：山梨県から1人

※3県では，岩手県22人，宮城県19人，福島県8人（平成26年12月25日時点）

おわりに

終わってみればあっという間の一年間でしたが，濃密で充実した一年間でした。

6月に実施した現地説明会（東町遺跡）では，多くの地元の方々にも参加していただき，地域の歴史に触れ，地元のよさを改めて感じていただくことができました。

また，調査が終わった後も現場（東町遺跡）を訪れました。訪れる度に土地が造成され，建物の基礎ができ，家が建つなど，ほんの一場面ではありますが，少しずつ復興へ進んでいる様子を目にすることができ，自分のやってきたことが少しでも福島の復興のために役立ったのかなと実感する事ができうれしく感じました。

休みの日は，福島県内をはじめ，東北地方各地へと足を運び，地元のおいしい物を食べたり，観光したりと有意義な時間を過ごし，リフレッシュすることができました。また，派遣仲間との定期的な情報交換会を通して親交を深めてきました。

多くの派遣仲間との出会い，被災されても前向きに生活している福島の方々との出会い，複式炉といった茨城では調査することのなかった遺構との出会い，様々な調査手法との出会いを通して多くのことを学びました。これらの貴重な経験は，私にとって大きな財産となりました。

福島で経験したことを今の職務に活かしていくことが派遣元への恩返しなるのでは，と考えながら日々の業務に励んでいます。また，福島の方々や派遣された方々が，復興に向け一生懸命頑張っている様子を伝えていくことも派遣職員の使命かと思い，機会があれば積極的に伝えていきたいと考えています。

最後に，私の派遣期間は終わりましたが，被災された方々が一日も早く元の生活に戻れることを願い，引き続き被災地の復興を応援していきたいと思います。

東北3県1市に派遣された仲間たち

ひたちのくにそうしゃぐう　ずいしんぞう

常陸国総社宮　随神像の修復

石岡市総社　総社宮　随神門

古仏修復工房　飯泉太子宗

修復にあたって

本像は延宝八年（1680 年）の製作年と製作に携わった仏師が判明している資料的にも貴重な像です。製作者は京五條通大佛師「寂幻」。判明している作例は元禄二年（1689 年）十二神将像　国分寺（東京都国分寺市）、元禄八年（1695 年）仁王像　板橋不動院（茨城県つくばみらい市）、その他、などがあります。

また造立後、胎内墨書から正徳五年（1715 年）、明和四年（1767 年）と比較的、短い間隔で修理されていることがわかっています。現在、表面に残っている彩色はこの時期のものだった可能性が高いのですが、その後、明和四年（1767 年）以降に修理を受けたとの記録は像内には残っておらず、また、修理の痕跡もほとんど残っていないことから、今回の修理は、およそ 250 年ぶりということになるかと思います。

本像は構造的には寄木造りという技法で製作されています。一本の木材から彫りだすのではなく、複数の材をブロック状に組み合わせ、彫りだすという製作技法です。本像は、ほぼ成人男性に近い大きさですから、寄木造りといってもそれぞれの材の大きさは大きいものです。また、頭部と体を別に作り、あとから首を差し込むというような江戸時代によく見られる構造をしています。

破損については、安置されている随神門には当時、ガラス窓のようなものはなかったため、吹き込んでくる雨や風、ホコリなどによる彩色の傷み。経年変化による、ニカワの劣化。それによる、各部材の遊離、それに伴う部材の紛失などです。ネズミがかじり、穴を広げてしまった所もあります。全体にばらばらでしたが、後補修理による改変がない、湿気による材の傷みは少ないなど、比較的保存状態は良かったのが印象的でした。

修復については、石岡市の文化財指定を受けているということもあり、新たな彩色などはおこなわず、あくまでも現状の彩色や部材の維持保存を中心に、欠けた個所やなくなった箇所は復元するという形で進めています。復元した箇所は、そのままでは目立ちますから、漆や絵具を使って全体に目立たないように色味を置いています。今回の修復によって、造像当時の雰囲気がよみがえったかと思います。

※以下　常陸国総社宮　随神像修理報告書より抜粋

像の概要

随神像（左大臣）修復後

座高９９．４ｃｍ
総高１３８．５ｃｍ

木造（カヤ材か）、寄木造り、玉眼、彩色像。頭部は前後二材を接合し、さらに前面材に関しては一部割り剥ぐ。巾子、老懸部分は別材。頭部は差し首とする。主要体幹部は前後三材を接合し、さらに側面材を接合する。袖部分は左右でそれぞれ主要三材を接合する。膝前材は主要一材を本体部に接合し、袖口材はそれぞれ別材。右手に矢、左手に弓を執る。左袖の内側に太刀を差す。垂下する左足は、袴部分は一材。足首から沓底一材に沓先は二材を接合する。裾の左右に複数の小材を接合する。籠は別材。矢は九本。なお、胎内に修理銘の書かれた木札が納入されていた。

随神像（右大臣）修復後

座高９９．２ｃｍ
総高１４０．６ｃｍ

木造（カヤ材か）、寄木造り、玉眼、彩色像。頭部は前後二材を接合し、さらに前面材に関しては割り剥ぐ。巾子、老懸部分は別材。頭部は差し首とする。主要体幹部は前後三材を接合し、さらに側面材を接合する。袖部分は左右でそれぞれ三材を接合する。膝前材は一材を本体部に接合し、袖口材はそれぞれ別材。右手に矢、左手に弓を執る。左袖の内側に太刀を差す。垂下する右足は、袴部分は一材。足首から沓底と沓先はそれぞれ別材。裾の左右に複数の小材を接合する。箙は別材。矢は九本。

胎内墨書について

・造立銘

左大臣　頭部前面材

延宝八申年
九月吉日
京五條通大佛師
寂幻

延宝八年（庚申）　1680 年

・修理銘

左大臣頭部　背面材

正徳五天
乙未ノ三月吉日
當地守木町
前嶋又六豊中

正徳五年（乙未）　1715 年

左大臣　膝前材

明和四口
後細色改　亥五月吉日
當所金丸町
岡野甚内
寧兼

明和四年（丁亥）　1767 年

左大臣　胎内納入板札　表面

延宝八歳出来
作者　京五條通
大仏師
正徳五年未五月
後細色　當所
森木町
前島又六
明和四歳
亥五月吉日
彩色改

當所金丸町
岡野甚内
寧兼（花押）
叶

左大臣　胎内納入板札　裏面

世話人
中町
一　佐谷戸小左衛門
木ノ地
一　森惣左衛門
香丸町
一　山口藤十郎
森木町
一　岩田清右衛門
右名主役人

仏師について

京五條大仏師　寂幻

作例

・延宝八年（1680 年）随神像　常陸国総社宮（石岡市）

・元禄二年（1689 年）十二神将像　国分寺（東京都国分寺市）

・元禄八年（1695 年）　仁王像　板橋不動院（つくばみらい市）

修復作業について

【修理基本方針】

現存している部材、彩色の保存を基本とし、亡失箇所、欠失箇所は形を復元する。

【損傷状況】

左大臣　修復前

・本体

ア）主要部材でニカワが劣化し、釘、カスガイ類が腐食しており、ほぼ全壊状態。

イ）玉眼が外れている。（両目）

ウ）亡失部分がある。（冠（巾子、右老懸、纓、簪、紐）、持物（弓、矢（1 本））、右袖口、裾の左部分、矢（9 本※箙に差し込まれた矢））

エ）欠失箇所がある。（目の周囲、左袖口の上部二箇所、左衣前面材の一部、左衣の太刀付近の一部、膝前材の一部、袴背面部分の一部（左足）、裾の一部、その他）

オ）部材不適合箇所がある。（膝前材の右足ふくらはぎ部分）

カ）鉄釘、鉄鎹が腐食しており、木材を傷めている。

キ）部分的に木材が腐朽している。

ク）表面彩色は大部分が剥落し、胡粉下地が露出している。

・台座

ア）亡失部分がある。（補強材）

イ）部分的に部材の接合が外れている。

ウ）天板に隙間が出来ている。

エ）表面彩色は大部分が剥落し、胡粉下地が露出している。

右大臣　修復前

・本体

ア）主要部材でニカワが劣化し、釘、カスガイ類が腐食しており、ほぼ半壊状態。

イ）玉眼が外れている。（左目）

ウ）亡失部分がある。（冠（巾子、纓、簪、紐）、持物（太刀、弓、矢（1 本））、矢（9 本※箙に差し込まれた矢））

エ）欠失箇所がある。（目の周囲、右老懸、腹部の内刳り付近、左衣の太刀付近の一部、衣背面材の一部、膝前材の一部、袴背面部分の一部（右足）、裾の一部、その他）
オ）修理不適合箇所がある。（右目の玉眼押さえ、腹部の内刳り付近）
カ）鉄釘、鉄鎹が腐食しており、木材を傷めている。
キ）表面彩色は大部分が剥落し、胡粉下地が露出している。

・台座
ア）亡失部分がある。（補強材）
イ）部分的に部材の接合が外れている。
ウ）天板に隙間が出来ている。
エ）表面彩色は大部分が剥落し、胡粉下地が露出している。

【修理仕様】
左大臣
・本体
ア）部材を解体し、再接合する。
イ）玉眼は嵌め直す。
ウ）亡失部分は新たに造る。（冠（巾子、右老懸、纓、簪、紐）、持物（弓、矢（１本））、右袖口、裾の左部分、矢（９本※箙に差し込まれた矢））
エ）欠失箇所は新たに造る。（目の周囲、左袖口の上部二箇所、左衣前面材の一部、左衣の太刀付近の一部、膝前材の一部、袴背面部分の一部（左足）、裾の一部、その他）
オ）部材不適合箇所は撤去し、新たに造る。（膝前材の右足ふくらはぎ部分）
カ）錆びた鉄釘、鉄鎹は除去する。
キ）木材の腐朽部分は樹脂で硬化させる。
ク）残っている彩色には剥落止めの処置をする。

・台座
ア）亡失部分は新たに造る。（補強材）
イ）部材の接合が外れている箇所は再接合する。また台座に補強を施す。
ウ）天板の隙間には小材を入れる。
エ）残っている彩色には剥落止めの処置をする。

右大臣
・本体
ア）部材を解体し、再接合する。
イ）玉眼は嵌め直す。（左目）
ウ）亡失部分は新たに造る。（冠（巾子、纓、簪、紐）、持物（太刀、弓、矢（１本））、矢（９本※箙に差し込まれた矢））
エ）欠失箇所は新たに造る。（目の周囲、右老懸、腹部の内刳り付近、左衣の太刀付近の一部、衣背面材の一部、膝前材の一部、袴背面部分の一部（右足）、裾の一部、その他）
オ）修理不適合箇所は修正する。
①右目の玉眼は一旦外し、嵌め直す。
②腹部の穴は塞いである木の薄板を外し、内刳り部分の欠損箇所を補う。
カ）錆びた鉄釘、鉄鎹は除去する。
キ）残っている彩色には剥落止めの処置をする。

・台座
ア）亡失部分は新たに造る。（補強材）
イ）部材の接合が外れている箇所は再接合する。また台座に補強を施す。
ウ）天板の隙間には小材を入れる。
エ）残っている彩色には剥落止めの処置をする。

左大臣　解体写真

新池台遺跡（しんいけだい いせき）

新池台遺跡で検出された墓坑の副葬品について

石岡市東石岡　　有限会社勾玉工房 Mogi　長谷川秀久

遺跡の立地

石岡市東石岡３丁目に所在する社会福祉法人地域福祉会の特別養護老人ホーム建設に伴い、平成22年７月26日から同年10月15日にかけて1,850㎡の発掘調査を実施しました。

霞ヶ浦の北端に近く、常総台地に連なる石岡台地から南側に突出する舌状台地上に位置しています。昭和56年には茨城県教育財団が南側に近接する舌状台地の先端部分を調査し、縄文時代前期の黒浜式期・浮島式期から古墳時代までの遺構が確認されたほか、弥生時代中期終末ごろの新池台式土器も発見されています。

発見された遺構と遺物

今回発見された遺構は、縄文時代前期（今から5,500年前）の黒浜式～浮島式期にかかる住居跡51軒、土坑488基でした。遺構外で出土した遺物には花輪台式や、諸磯ａ式、十三菩提式、五領ヶ台式など縄文時代早期から中期初頭の、県内でも資料の少ない土器も発見されています。弥生時代の遺構や遺物は発見できませんでした。

前期中葉の黒浜式期の住居跡は調査区の北西方向に集中し、浮島式期の住居跡は調査区の中央から南東側にかたよって発見されています。両時期の集落は若干の重なりを見せながらも、その中心がずれています。また、黒浜式期の住居跡は平面方形・不整楕円形が中心で、炉には炉石が設置されていました。浮島式期では平面不整形または楕円形の住居が中心で、柱穴が不明瞭なものが多く、炉は確認されていません。

縄文時代前期の墓

黒浜式期の住居跡群の南側に、直径70cm前後、深さ60cm前後の平面楕円形の土坑群が検出されました。その断面形状は鍋底状またはＵ字形になっています。慎重に調査した結果、これらのうち、２基の土坑から副葬品と判断される遺物が出土しました。副葬品の出土と、人の手によって埋め戻されていたことから、これらの土坑は墓と判断しました。

図１

土坑の分布は図６の分布に示したとおりです。集落域と墓域は区分けがされているようです。一方で、黒浜式の最終末期では黒浜式と浮島式の明瞭な時期区分ができない遺構も多く、浮島式土器を主体に出土している住居が集中する範囲にも黒浜式の墓坑が点在していました。集落が黒浜式期から浮島式期へと移行する段階で、墓域の区割りが崩れていったことが想定されます。

その典型的な例として、調査区の南側で検出された400号土坑は、埋没後に上部を削平して浮島期の住居が構築されました。土坑の底には副葬品として黒浜式土器と装身具が埋納されていました。（図１・２）。

副葬品を出土した土坑

縄文時代前期の墓で副葬品を埋納した例としては、全国的に見てもそう多くはありません。

400号土坑のほかにも、186号土坑では黒浜式土器のやや大型の破片とともに、縦型の石匙（いしさじ）が出土しています。山形県高畠町の押出（おんだし）遺跡にみられる石槍型の石匙です。石材には朝日連峰を産地とする珪質頁岩を用い、側面に幅が一定の押圧剥離による並行剥離が施され、技法的にも東北地方の大木式の影響を受けるものと判断されます（図３）。

前出の400号土坑では、装身具の出土がありました。土坑底面からは黒浜式土器の底部破片（4）２個体分と琥珀製丸玉４点（11～14）、滑石製管玉４点（７～

図 2

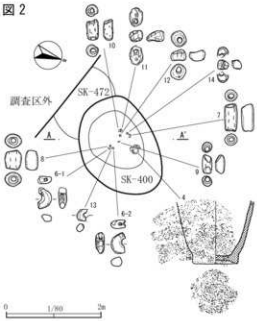
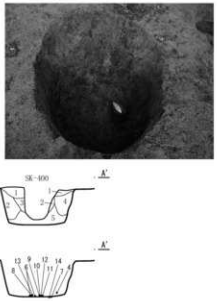


図 3



10)、ケツ状耳飾り 1 点（2 個に破損・6）が出土しています。

割れたケツ状耳飾りと勾玉

ケツ状耳飾りとは、今から 8,000 年ほど前の縄文時代早期に中国から日本に伝わった耳飾りです。中国では堅い白色の玉が用いられましたが、日本ではやわらかい石が使われています。耳朶に穴を開け、ぶら下げるように耳に通して用いました。

図 4

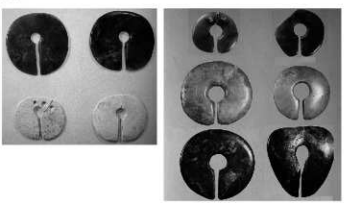


図 4 は関東地方の各地で発見されたケツ状耳飾りです。千葉県北部や霞ヶ浦の周辺では粘土を焼いて作ったケツ状耳飾りもたくさん発見されています。

本遺跡の 400 号土坑におけるケツ状耳飾りの出土状況は、破損した 2 片を背中合わせになるように配置し、その間に琥珀製丸玉をはさみ込んでいます。これらの玉類は、おそらくケツ状耳飾りを中央部に配し、その両側に琥珀製丸玉と滑石製管玉を交互に紐を通した首飾りとして用いられたものと思われます（図 5）。

本来、ケツ状耳飾りはその名前の通り耳飾りとして用いられていました。耳飾りは中央部で破損することが多く、縄文人は割れた耳飾りに穴をあけ、糸のようなもので縛って再び耳飾りとして使い続けていました。また、割れたケツ状耳飾りは C 字形となり、勾玉の形に似ています。勾玉は縄文時代後期ごろから生まれた、日本独自の装飾品と考えられていますが、その形の由来ははっきりしていません。動物の牙説、胎児の形説、魂の形説、そしてケツ状耳飾りの割れたものを首飾りに用いる説等があります。

今回、400 号土坑から発見された一連の首飾りには、前述のとおり図 5 のような状況が想定されます。ケツ状耳飾りの割れたものが、琥珀玉を間にはさみ込んだ状態で発見されました。これは勾玉の起源がケツ状耳飾りにある可能性を示す、国内で初めての発見です。

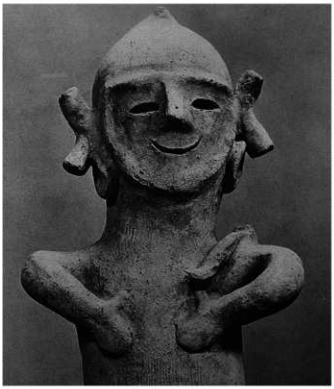
図 5

玉類の材質

琥珀は赤い玉で、遺跡の位置的環境から銚子産が想定されます。管玉は、乳白色に緑色の斑点が多く含まれ、輝石の混入が特徴的で、常陸太田周辺で産出する滑石に似ています。比較的近い地域からの採集が想定されます。一方、ケツ状耳飾は白色を呈し、不純物の少ない

滑石を用いています。他の地域から運び込まれた可能性があります。

太古の昔から、『三種の神器』として日本人に愛された勾玉の起源が、今回の発見で直ちにケツ状耳飾りと結びつけるのは、まだ研究を進めなければなりませんが、今回の発見は極めて重要な歴史解明の手掛かりとなる発見になりました。



おわりに

本遺跡の発掘調査報告書は平成 22 年 12 月に刊行されています。また、発掘調査にかかわる資料はすべて石岡市教育委員会で保管されています。

なお、本稿をまとめるに当たり、齋藤弘道・瓦吹堅・小杉山大輔・谷仲俊雄・角張淳一（故人）・大賀健の皆さまにご指導とご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

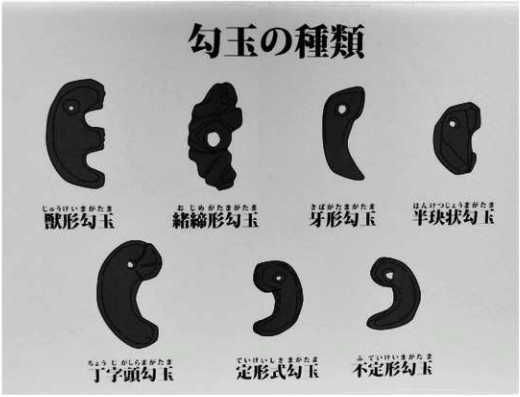
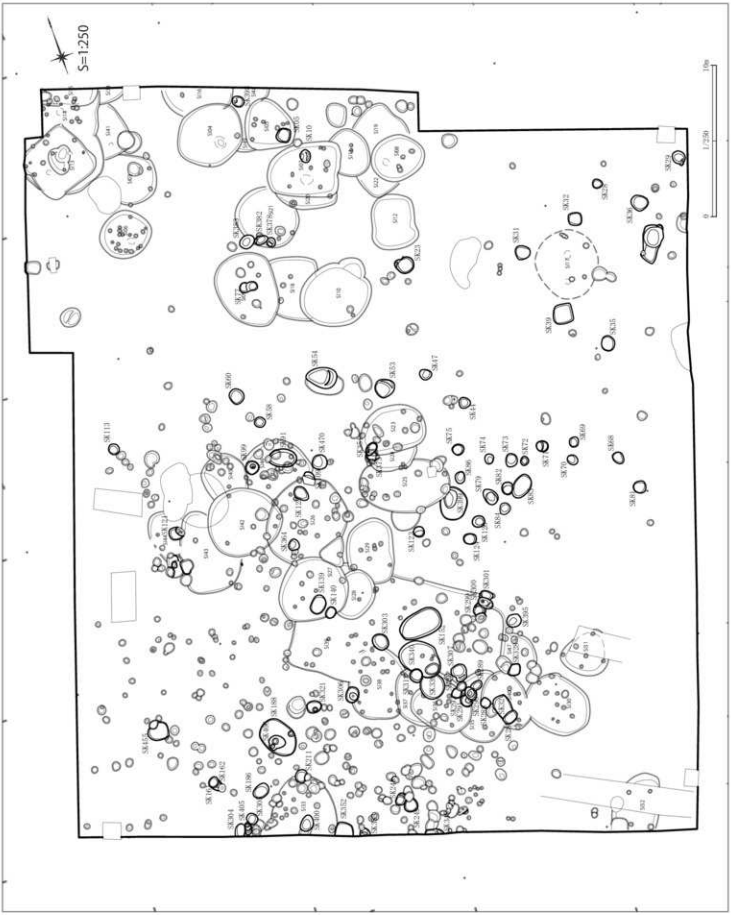


図6



佐久上ノ内遺跡（さくかみのうち）

佐自塚古墳被葬者の住んだ豪族居館か

石岡市佐久

石岡市教育委員会　谷仲俊雄

遺跡の概要

佐久上ノ内遺跡は，茨城県石岡市（旧八郷町）佐久に所在する遺跡です。遺跡の所在する舌状台地の先端には古墳時代前期の前方後円墳である佐自塚古墳（墳丘長 58m）が所在し，以南には「柿岡古墳群」（後藤・大塚 1957）が展開しています。「柿岡古墳群」は，古墳時代前期の前方後方墳の丸山古墳（墳丘長 55m），長堀 2 号墳（墳丘長 46m），前方後円墳の可能性のある長堀 6 号墳などが存在する常陸屈指の前期古墳の集中域です。

発掘調査は，茨城県による農村交流基盤整備事業に伴い農道整備部分 1,600 ㎡を対象に平成 25 年 9 月～12 月に実施しました。調査主体は株式会社東京航業研究所（担当者：林邦雄）です。

検出された遺構は竪穴住居跡 38 軒（弥生，古墳，奈良・平安時代），溝，土坑などで，なかでも 1 号溝は，調査区を東西および南北に走る溝で，調査区外のソイルマーク等を参考にすると，東西約 72m×南北約 53m を方形に区画する溝となります。幅は 2.5～3.7m 程度，深さは 0.9～1.2m 程度で，断面は台形状でした。

溝からは，多量の古墳時代前期中葉～中期前半の土師器が多量に出土しています。溝の区画内からは溝と同時期と考えられる遺構は確認されていませんが，溝の規模や形状，区画の推定平面形，後述する遺物の出土状況から窺える祭祀の痕跡などからは，古墳時代における「豪族居館」の区画溝の可能性が高いと考えられます。

出土品の概要

1 号溝からは，古墳時代の土師器が多量に出土しています。特に，上層において約 6～7m 間隔で集中する地点と，底面直上において集中する地点が存在します。両者の土器には年代的な隔たりがあり，下層は古墳時代前期中葉，上層は古墳時代中期前半と考えられます。上層出土土器については，上述のような集中地点から溝が埋まりきる直前に投棄されたと考えられます。また，下層の土器周辺の溝底面や壁に弱い被熱痕が確認されており，また被熱範囲と同一範囲で覆土に炭化物・粒が確認されていることから，儀礼が行われ，そこで使用された土器がそのまま放棄されて，自然に埋没中に土圧などの作用で潰れた状況で出土したと推測されます。したがって，溝の存続時期は古墳時代前期中葉を上限，中期前半を下限とすることができます。

遺跡の評価

佐久上ノ内遺跡で検出された 1 号溝を「豪族居館」の区画溝とすると，この「居館」に対応する古墳として考えられるのは，南に約 700m の距離にある佐自塚古墳です。佐自塚古墳は，1963 年に発掘調査が行われ，主体部上から完形の高杯 2 点が出土しているほか，粘土槨周辺からも小型丸底土器などが出土しています（佐自塚古墳調査団 1963，大塚 1972）。これらの土器は 1 号溝の下層土器群と上層土器群との間に編年できるものです。佐自塚古墳の出土土器が主体部上出土―埋葬時の供献行為によるものと考えると，佐自塚古墳の埋葬時期は居館の存続時期内に位置付けられるとともに，その被葬者の活動時期も居館の存続時期と重複することになります。さらに，両者の位置関係を考えると，佐自塚古墳の被葬者の居館こそが佐久上ノ内遺跡と特定することも可能となります。

佐自塚古墳は主体部上から土器群が出土した恵まれた事例という点も幸いしますが，その居館が土器編年や埋没状況から特定できる，言い換えれば，佐久上ノ内遺跡―佐自塚古墳という居館―奥津城のセット関係が考古学的所見から特定できる，極めて貴重な事例になります。

文献

井　博幸 2012「茨城県中央部における前期・中期古墳の展開」『嚴良岐考古』第 34 号

大塚初重 1972「古墳出土の土師器Ⅰ　佐自塚古墳出土の土器」『土師式土器集成』本編 2

後藤守一・大塚初重 1957『常陸丸山古墳』丸山古墳顕彰会

佐自塚古墳調査団 1963『佐自塚古墳調査概要』

林　邦雄編 2014『佐久上ノ内遺跡―H25 農村交流基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―』東京航業研究所・石岡市教育委員会

林　邦雄・谷仲俊雄 2014「石岡市佐久上ノ内遺跡の調査」『平成 26 年度茨城県考古学協会研究発表会資料』茨城県考古学協会

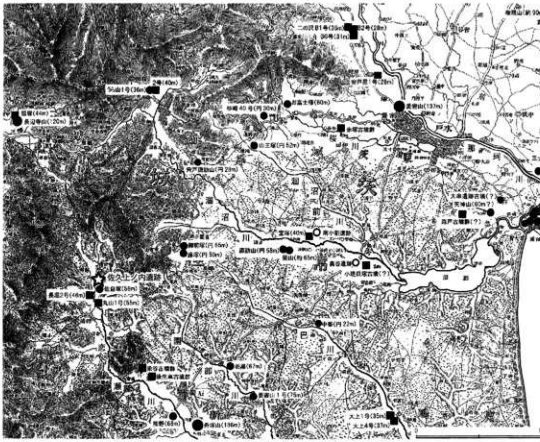


図1　佐久上ノ内遺跡の位置と周辺の遺跡（1）（井 2012 に加筆）

図2　佐久上ノ内遺跡と「柿岡古墳群」（後藤・大塚 1957 に加筆）

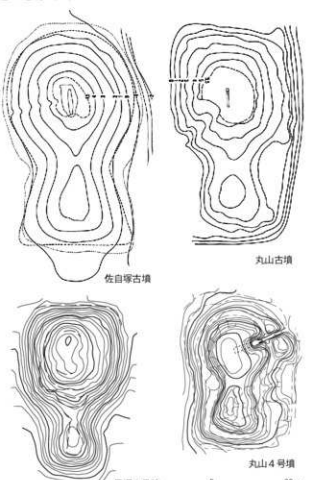
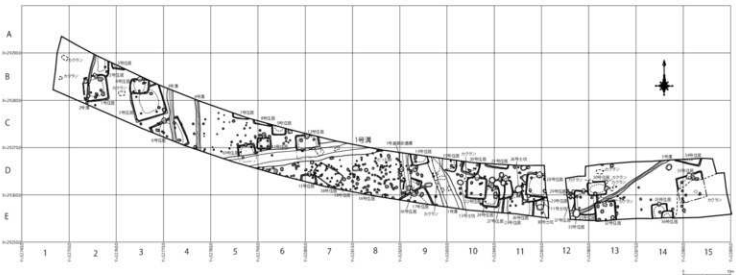


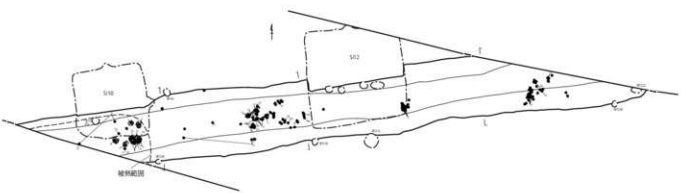
図３　「柿岡古墳群」の前方後円墳・前方後方墳

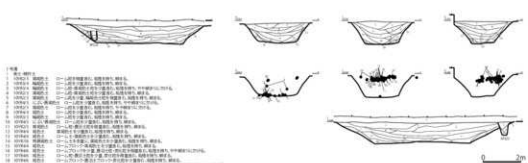
図4　佐久上ノ内遺跡の位置と周辺の遺跡（2）

表1　佐久上ノ内遺跡と周辺の遺跡調査歴

遺跡名	調査歴	古墳時代の主な遺構	文献
佐久上ノ内遺跡	2013年発掘	竪穴住居跡,溝(古墳時代前期～中期)	林2014
佐久松山遺跡	2008年発掘	石製模造品(剣形・有孔円盤)	齋藤・大橋2009
柿岡浦の巣遺跡	2013年発掘	竪穴住居跡13(古墳時代後期主体),鍛冶工房1(古墳時代中期)	
柿岡小坊内遺跡	2012年発掘	竪穴住居跡3(古墳時代後期主体)	
柿岡池下遺跡	2007年, 2011年発掘	竪穴住居跡2(古墳時代中期, 後期)	小川・小杉山2007, 小杉山・曽根2013
佐久上ノ内古墳群		円墳3, 石棺？	
佐自塚古墳	1963年発掘	前方後円墳(墳丘長58m, 古墳時代前期後半～末)	佐自塚古墳調査団1963
長堀2号墳	1972年, 2010年測量	前方後方墳(墳丘長46m, 古墳時代前期)	早稲田大学考古学研究室1973, 小杉山・曽根2012
丸山古墳	1952年発掘	前方後方墳(墳丘長55m, 古墳時代前期後半)	後藤・大塚1957
丸山4号墳	1952・54年発掘 2007年測量	前方後円墳(墳丘長36.5m, 古墳時代後期)	後藤・大塚1957, 佐々木・鶴見2012, 曽根2012
和尚塚古墳		円墳(15m), 石棺？	後藤・大塚1957, 西宮1999







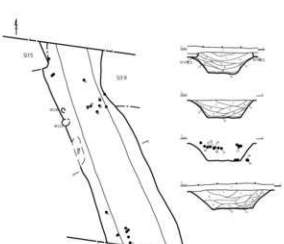
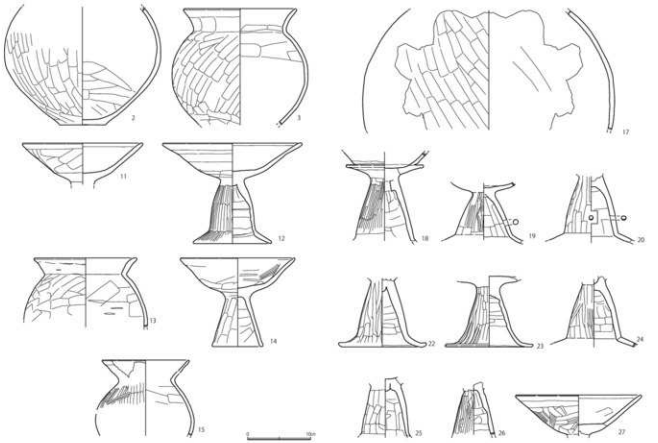


図５　佐久上／内遺跡
全体図（S=1/800），溝 SD01（S=1/200）

上層



下層

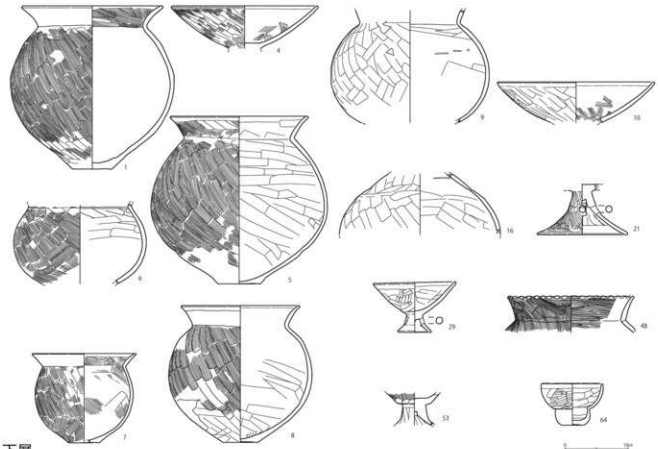


図6　佐久上ノ内遺跡　出土遺物（S=1/6）

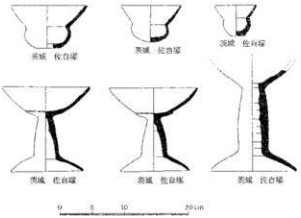


図7　佐自塚古墳 出土土器（S=1/6）

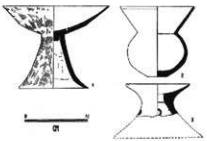
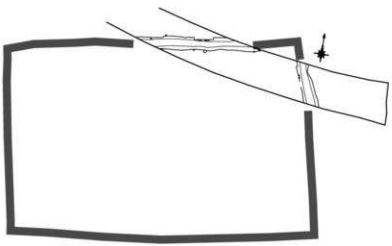


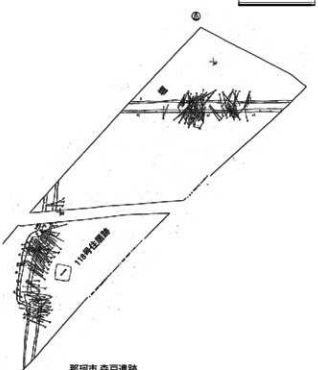
図8　柿岡・館遺跡 出土土器（S=1/6）
（旧 柿岡中学校校庭出土）



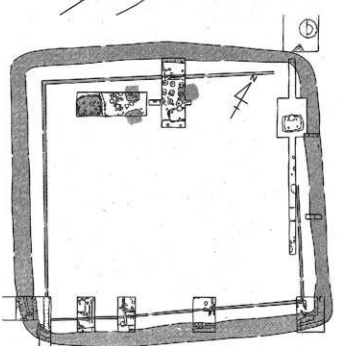
石岡市 佐久上ノ内遺跡

0　20m

桜川市 辰海道遺跡



那珂市 森戸遺跡



常総市 国生本屋敷遺跡

図9　茨城県内の「豪族居館」（S=1/1,000）

宮平遺跡（みやだいら）

石岡市染谷

石岡市教育委員会　谷仲俊雄

遺跡の概要

宮平遺跡は，茨城県石岡市染谷に所在する遺跡です。「常陸風土記の丘」建設に伴い，昭和 63 年に試掘調査を行ったところ，台地上の全面で遺跡が確認されました。建物等の建設によって遺跡が破壊されてしまうところは本格的な発掘調査を行い，そのほかの公園となる部分は盛土等が行われ，遺跡は地下に保存されています。

茨城県指定文化財となっている「巴形銅器」（弥生時代～古墳時代）の出土が著名ですが，旧石器時代の石器や，縄文時代の竪穴住居跡や土坑，弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡，奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡と，各時代の遺構・遺物が確認されている石岡市内でも屈指の大遺跡です。

平成 25 年度発掘調査の概要

平成 25 年 12 月，公衆用トイレ建設工事に伴い，約 30 ㎡（3m×10m）の発掘調査を行いました。調査地は，「ふれあい広場」と呼んでいる芝生広場の北西隅にあたります。「ふれあい広場」は，常陸風土記の丘建設に際しては，盛土が行われ，遺跡が保存されていた部分です。県指定文化財の巴形銅器が出土した地点もこの「ふれあい広場」部分で，今回の調査地との距離は 30m 程になります。

検出した遺構は縄文時代の土坑群や，奈良・平安時代の竪穴住居跡 1 軒で，出土遺物は縄文時代中期の土器や，石皿などの石器，そして，奈良・平安時代の土器で，遺物収納箱 3 箱になります。

土坑のうち，最大のものは調査区の中央で確認した土坑 SK01 です。西側が調査区外に続いていますが，径 2m 以上のもので，口が狭く，底が広くなっている「袋状土坑（フラスコ状土坑）」と呼ばれるものでした。このような土坑は，縄文時代の遺跡に多く見られますが，こうした形状は温度を比較的一定に保つ効果があることから，貯蔵穴として使用されたものと考えられています。縄文時代中期の土器が多量に出土しています。そのほかの土坑群からも縄文時代中期の土器や出土していることから，同じ時期と考えることができます。「縄文時代中期に至って爆発的に増加する」（福山 1992）というこれまでの調査所見と合致します。

奈良・平安時代の竪穴住居跡 SI01 は調査区の北側で，住居跡の南東部分だけが確認されました。調査区の北には谷津が入り込んでおり，台地の縁辺部にあたります。遺構の密度は縄文時代ほど高くはありませんが，台地高位の平坦部だけではなく，斜面部や低地にも集落が広がるのがこの時期の特徴のようです（松田 1989）。

遺跡の評価

平成 25 年度の発掘調査は，小規模な面積にもかかわらず，竪穴住居跡 1 軒や縄文時代の土坑群を検出し，濃密な遺構分布を再確認することとなりました。しかし，まだ十分な整理ができていないため，個々の遺構の時期等については，詳しく検討できていないところがあります。

宮平遺跡のように遺跡全体の調査が行われ所見が得られている遺跡は石岡市では数少なく，遺跡内の土地利用がわかる貴重な事例になります。その一方で，出土遺物は膨大であり，調査データを整理・公開できていないという反省点もあります。

また，遺跡内すべてが「記録保存」されている（＝遺跡じたいは現地には残っていない）というわけではなく，遺跡が現地に保存されている部分も多く，すなわち，将来的には発掘調査による検証が可能な遺跡になります。

さらには，周辺の波付岩遺跡や峠遺跡，中島遺跡についても調査所見が蓄積されています。遺跡の規模や密度をみると，中心となる遺跡は宮平遺跡だったと考えられますが，それら周辺の遺跡と合わせ，「遺跡群」として，より立体的な検討も可能な段階となっていると言えます。

文献

安藤敏孝・箕輪健一・岩松和光・桜井二郎・佐々木義則 1989『宮平遺跡―発掘調査概報―』石岡市教育委員会

石岡市文化財関係資料編纂会 1995『石岡市の遺跡―歴史の里発掘 100 年史―』石岡市教育委員会

福山俊彰編 1992『宮平遺跡―平成三年度発掘調査報告書―』石岡市教育委員会・山武考古学研究所

松田政基編 1989『宮平遺跡発掘調査報告書』石岡市教育委員会・山武考古学研究所

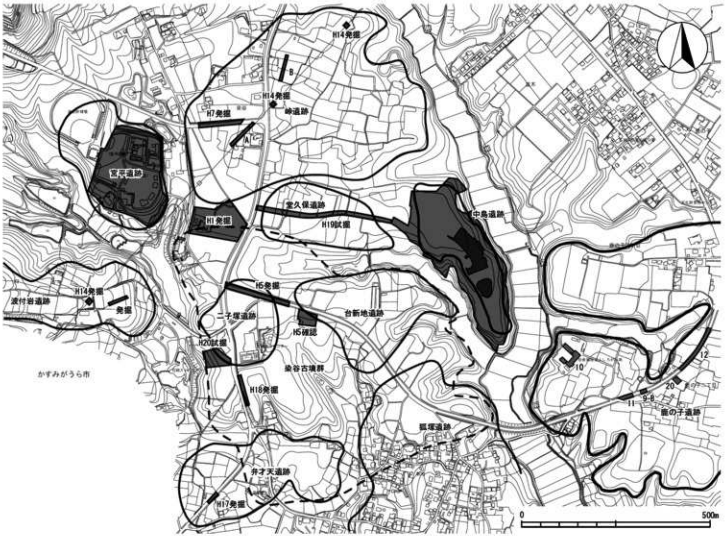


図1　宮平遺跡と周辺の遺跡（S=1/10,000）

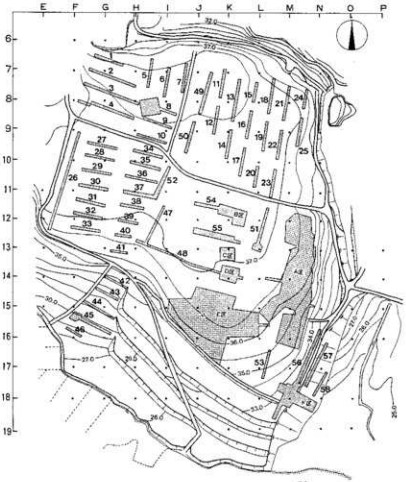


図2　宮平遺跡　全体図（1）
（S=1/2,500）

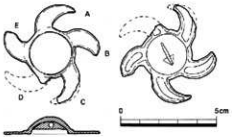


図3　宮平遺跡出土
巴形銅器（S=1/2）

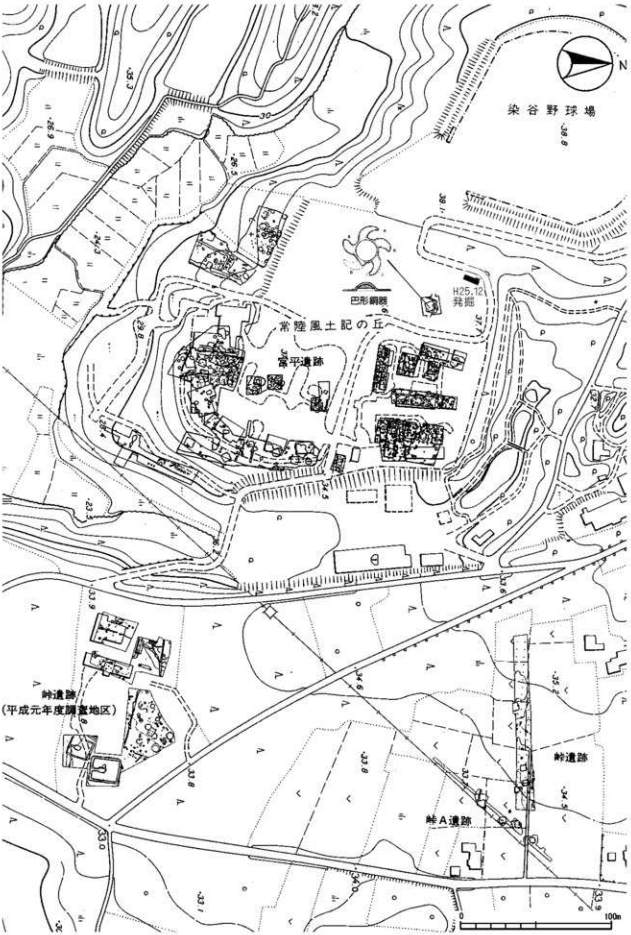


図4　宮平遺跡　全体図（2）（S=1/2,500）

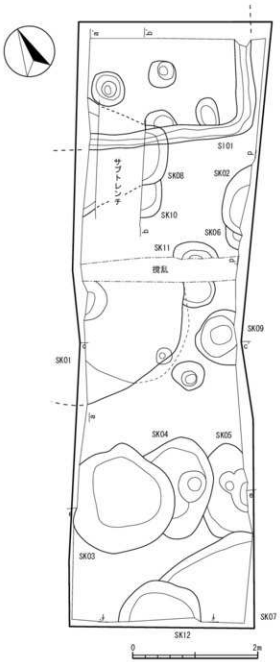


図5　平成25年度発掘調査
全体図（S=1/60）

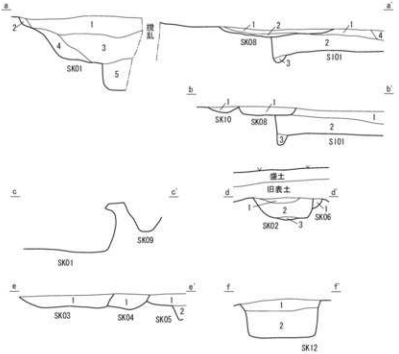


写真1　SK01完掘状況（北東から）

写真2　遺構確認状況（北から）

写真3　完掘状況（北から）

はちけんだいえんぺいごう
八軒台掩蔽壕

戦争末期に急造された石岡海軍航空基地の飛行機置き場か

石岡市東大橋

株式会社東京航業研究所　柏山 滋

遺跡の概要

八軒台掩蔽壕は，茨城県石岡市に所在する戦争遺跡です。本遺跡は、アジア太平洋戦争の末期に急造された石岡海軍航空基地周辺に 30 基ほど設置された、軍用機や燃料、弾薬を敵の空襲から守るために盛り土で囲った露天の格納施設、無蓋型掩体壕の一つと考えられています。

発掘調査は，店舗建設に伴い進入路となる道路建設部分 160 ㎡を対象に平成 26 年 6 月に実施しました。また、発掘調査に先立ち、掩体壕の現況測量も行いました。

調査の成果

現況測量の結果、盛り土された土堤部の規模は、幅が約29.5m、奥行が約26m。平面形はC字型を呈しますが、開口部の中央を通した主軸線に対して非対称で歪んでいることが分かりました。格納部の規模は、幅が約 14.5m、奥行が約 17.5m。この規模は、当時の石岡海軍航空基地に配備されていたどの軍用機も格納することが出来ます。しかし、土堤部の高さは、現地表面から 2.4m とやや低く、格納した軍用機を隠蔽、防護するには不十分かもしれません。この他、土堤部の南東隅に隣接する、高さ約 1m の土まんじゅう状の高まりや、開口部の両脇にある土堤部の両端の先には、それぞれに長軸で約 3～5m、現状で現地表面から 30～60cm の浅い窪みがありますが、これらは空襲を警戒する歩哨のための施設の可能性が指摘されています *(註 1)*。

掩体壕の土堤部を構築するための土取りの跡と考えられている溝状の遺構である周掘部は、土堤部の周囲において断続的に 2 箇所で確認できます。一つは開口部側より見て右（南西）側面から奥（南東）面まで、土堤部の外周に沿って溝状に巡っています。もう一つは土堤部の奥（南東）面で、今回の発掘調査ではこの 2 つ目の周掘部の大部分が調査範囲に含まれました。

発掘調査の結果、周掘部は深さが現地表面から 1.3～1.5m。一番深い所では鹿沼土の層の上面が露呈していました。周掘部の断面は浅い皿状で比較的に緩やかな傾斜で掘り込まれています。特に、土堤部の奥（南東）面に隣接する周掘のほぼ中央部は、土堤部から見て外側から周掘の底面に向かって緩やかに傾斜する張り出し部があります。このスロープは、人が上り下りするのに丁度良い傾斜で、実際に発掘調査でも土を搬出する際の”ネコ道”として重宝しました。同様に、2 つの周掘部の境目も傾斜が緩やかです。これらの斜面は土の搬出路かもしれません。

戦時中、米軍は石岡海軍航空基地を「Ishioka East A/F（石岡東飛行場）」として認識し、これを攻撃対象とみなして散発的に空襲していますが、今回の調査では、米軍の機銃弾など当時の遺物は出土していません。

遺跡の評価

本遺跡が属する石岡海軍航空基地の近隣にあり、尚且つ同じ海軍が管轄する飛行場である小美玉市の百里原海軍飛行場における掩体壕と比較すると、格納部の規模は類似しますが、本遺跡の掩体壕は土堤部の平面形が歪んでいたり、土堤部の高さが比較的に低かったり、周掘部の掘り方が比較的に雑であったり *(註 2)* という特徴が見られます。このような違いを生んだ原因として 2 つの可能性を考えています。

一つは、本遺跡が未完成の掩体壕であった可能性です。本遺跡は資料に残る石岡航空基地の範囲外にあります。この事は、本遺跡が当初の飛行場建設計画に無かった拡張区画に作られた比較的に後から築造され始めた掩体壕で、未完成のまま終戦を迎えたのかもしれません。

もう一つ考えられるのは、本遺跡が軍用機を格納する掩体壕では無かった可能性です。終戦後に本遺跡には油の入った大量のドラム缶が残っていたという証言 *(註 3)* があります。また、石岡海軍航空基地は、製造された飛行機や百里原海軍飛行場配備機を分散・秘匿する「飛行機置場」だけでなく「燃料置場」の役割を担っていたとの指摘もあります。

石岡市内における戦争遺跡の調査は始まったばかりです。今後の調査を通じ、石岡海軍航空基地の実像や、茨城沿岸での本土決戦が実現していた場合に石岡の地が如何なる戦場になっていたのか等、考古学から新たに見えて来るものもあるでしょう。

（註１）伊藤厚史氏からのご教示。土まんじゅう状の高まりは、航空基地の最東端に位置し東方から飛来して来る敵機を最初に発見し得る本掩体壕で見張り役が立つ台の跡と考えられ、開口部両側の浅い窪みは、掩体壕内で整備する人を機銃攻撃から守るための見張り役の立ち位置及び退避する塹壕跡と考えられるとのこと。

（註２）調査現場を訪れた百里原の掩体壕の調査担当者であった茨城県教育庁の荒蒔克一郎氏からも、小美玉市の小玉秀成氏からも、異口同音に「百里原の掩体壕と比べて周掘の掘り方が全体的に雑である」という共通した内容の指摘をいただいた。

（註３）石岡市東大橋地区在住の小松崎和己氏からの聞き取り。氏の親族からの伝聞とのこと。

参考文献

石岡市遺跡分布調査会 2001『石岡市分布調査報告書』石岡市教育委員会

石岡市史編さん委員会 1983『石岡市史』中巻Ⅱ、石岡市

伊藤厚史 2002「遺構と遺物の調査法」『しらべる戦争の事典』柏書房

伊藤純郎 2008『フィールドワーク　茨城県の戦争遺跡』平和文化

小野政美　前島直人 2009『石川遺跡　石川塚　旧百里原海軍飛行場掩体壕群』茨城県教育財団

小美玉市史料館 2009「文化財保護事業(32)旧百里原海軍飛行場掩体壕群第 12・13 壕掩体壕」『小美玉市史料館報 第三号』小美玉市史料館

小玉秀成 2010「旧百里原海軍飛行場掩体壕群における無蓋掩体壕の構築手法」『小美玉市史料館報 第四号』小美玉市史料館

佐用泰司 2001 『海軍設営隊の太平洋戦争』光人社

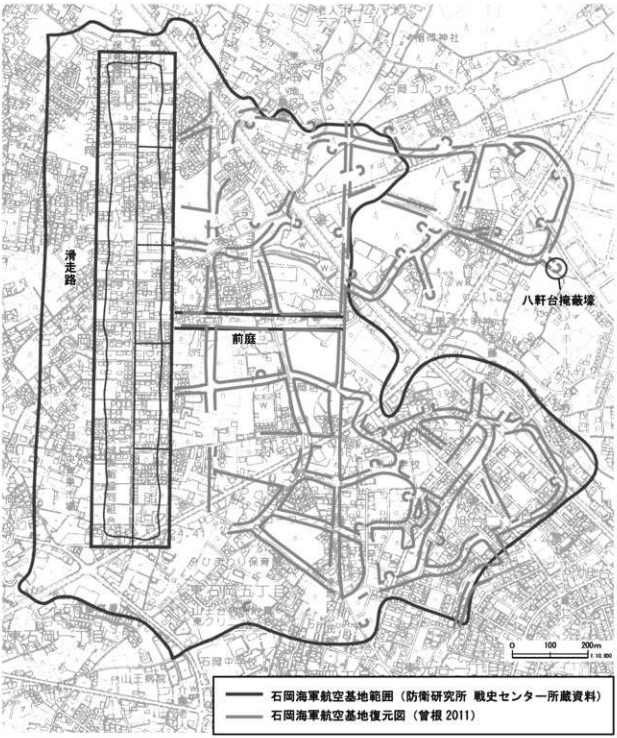
写真にみる石岡の昭和史研究会 1995『写真集 いしおか昭和の肖像』写真にみる石岡の昭和史研究会出版部

曾根俊雄 2011「石岡海軍航空基地について」『婆良岐考古 第33号』婆良岐考古同人会

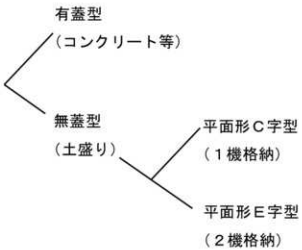
高野倉寛 1991「出し山飛行場」『石岡郷土誌 第14号』

矢口正一 2014 「霞ケ浦周辺旧海軍施設の消滅―史実・石岡航空基地の例―」『CROSS T&T No.46』一般財団法人 総合科学研究機構

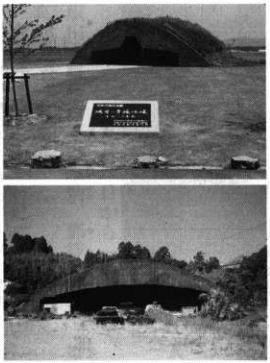
用松律夫 2003「掩体壕が語る戦争の実相」『続　しらべる戦争遺跡の事典』柏書房



第１図　石岡海軍航空基地復原図



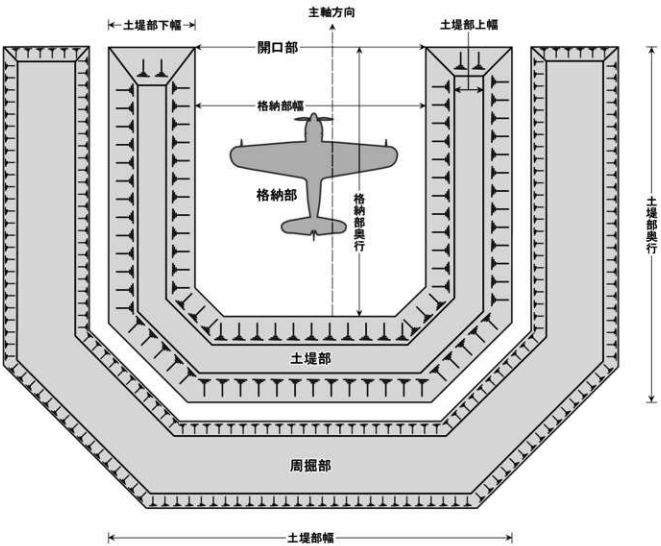
第２図　掩体壕の分類



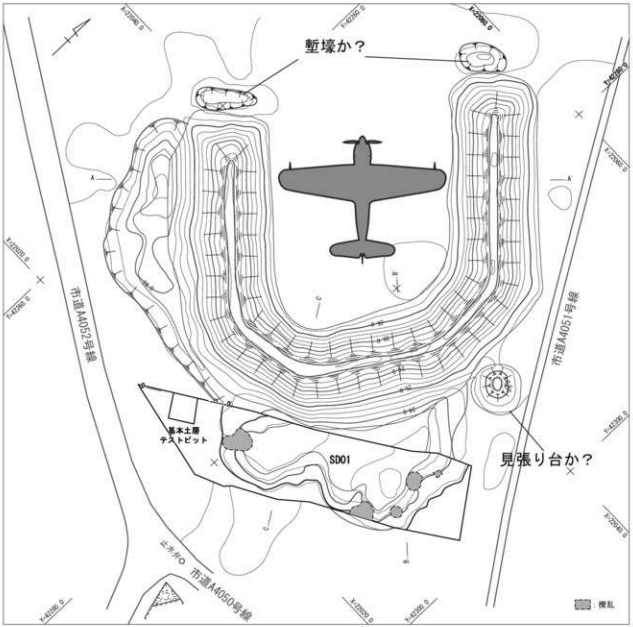
❶翼型（宇佐市城井一号掩体壕）

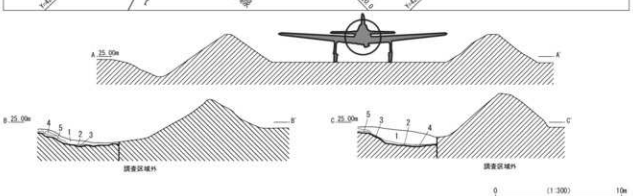
❷トンネル型（宮崎県赤江基地）

第３図　有蓋掩体壕（用松 2003）



第４図　Ｃ字型無蓋掩体壕の模式図





SPB-B'

1 表土
2 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性やや無し。しまり無し。ローム粒子やや多量。ロームブロック（φ1～2cm）やや少量。
3 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性やや無し。しまりやや無し。ローム粒子やや多量。ロームブロック（φ2～4cm）やや多量。
4 7.5YR4/4 褐色土 粘性やや有り。しまりやや有り。地山（ソフトローム）。
5 7.5YR4/6 褐色土 粘性有り。しまりやや有り。地山（ソフトローム）。

SPC-C'

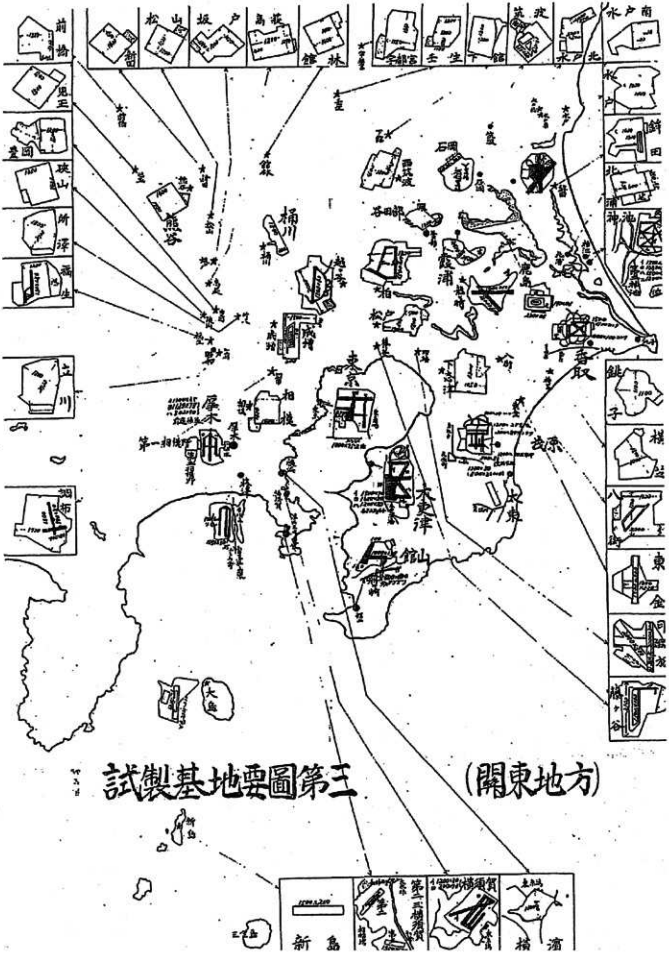
1 表土
戦後のゴミ多量。
2 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性やや無し。しまり無し。ローム粒子やや多量。ロームブロック（φ1～2cm）やや少量。
3 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性やや無し。しまりやや無し。ローム粒子やや多量。ロームブロック（φ1～2cm）やや多量。
4 7.5YR3/4 暗褐色土 粘性やや無し。しまりやや無し。ローム粒子やや多量。ロームブロック（φ2～4cm）やや多量。
5 7.5YR4/4 褐色土 粘性やや有り。しまりやや有り。地山（ソフトローム）。

第５図　八軒台掩蔽壕全体図

掩体壕全景（南より）

調査区全景（東より）

第６図　八軒台掩蔽壕調査写真



第７図　『試製基地要図三（関東地方）』（防衛研究所図書館史料閲覧室所蔵）

石岡市文化財調査報告会
発表要旨

2015（平成27）年８月８日発行

編集　石岡市教育委員会　文化振興課

発行　石岡市教育委員会
〒315-0195　茨城県石岡市柿岡5680-1
常陸風土記の丘
〒315-0007　茨城県石岡市染谷1646

印刷　共和印刷株式会社
〒315-0001　茨城県石岡市石岡2747-68